

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25350790

研究課題名(和文) 朝鮮李朝の「倭劔」に関する文献研究

研究課題名(英文) Literature Study about "Wae-geom" in Korean Lee Dynasty

研究代表者

大石 純子(OHISHI, Junko)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：50410163

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：「倭劔」をめぐる日本から中国・朝鮮半島への日本剣術伝播の動態の一端を講演や発表を通して海外に公表することができた。また、用語「倭劔」の来歴の一端を考察することができた。加えて、伝播した日本剣術が文化変容する様相の一端について論じた。さらに、『古事記』の武道用語分析を通して、日本から朝鮮半島への武技伝播に関わる足掛かりを作ることができた。最後に、用語「倭劔」を『韓國文集叢刊』の中に探り、そこで抽出された用語の解釈を通して、用語「倭劔」の朝鮮社会における位置づけの一端について考察の方向性を捉えた。以上が、本研究の期間内における成果である。

研究成果の概要(英文)：I was able to share the information about that a part of the dynamics of Japanese swordsmanship diffusion from Japan to China and the Korean Peninsula through lectures and presentations abroad. In addition, I was able to consider a part of the history of the term "Wae-geom". In addition, I discussed a part of the aspect of the transformation of the Japanese swordsmanship that had been diffused. Furthermore, through martial arts vocabulary analysis of "The Records of Ancient Matters(Kojiki)", I was able to create a foothold related to martial diffusion from Japan to the Korean Peninsula. Finally, I looked for the term "Wae-geom" in the "Korean Literary Collection in Classical Chinese (Kankoku-bunshu-soukan)" and grasped the direction of consideration about a part of the position of the term "Wae-geom" in the Korean society through interpretation of the extracted terms. This is the result within the period of this research.

研究分野：武道史、武道論、武道海外伝播論

キーワード：倭劔 武道 刀剣 剣術 剣道 伝播 国際化

1. 研究開始当初の背景

剣道は、日本国内だけでなく、世界各地でおこなわれるようになった。その国際普及の一方で、文化や習慣の相違から生まれる行き違いなど課題も表出している。

特に、韓国における剣道は、ある種の独自性(剣道を「Kendo」ではなく、母国語で「コムド」と発音・表記、独特の「剣道袴」の着用、蹲踞をしない立合い、力強さとスピードを主体とした攻防技術、独自の剣道史観など)をもって行っている。このようなことは、わが国の伝統的な剣道観からすれば違和感があるのみでなく、我々に一種の戸惑いを与えてもいる。しかし、「文化の諸要素が伝播する場合、原則として、ある程度の変化をうける」(石田英一郎、泉靖一、宮城音弥監修、『現代文化人類学(全5巻)第2巻 人間の文化』、中山書店、p208、1966年)ことは、文化伝播に共通する特徴とされている。筆者は、特有の展開をみせる韓国剣道のあり方を否定しようとするものではなく、単に、その変化の背景にある伝播と受容の過程に強い関心を抱くものである。

そのような動機に端を発し、朝鮮半島における刀剣に関する技法について概観したところ、朝鮮李朝期(1392年~1910年)1790年に成立した『武藝圖譜通志』に行き着いた。ここには、24種類の多様な武技が掲載されているが、それらの中に刀剣を操作する技法と絵図が掲載されている。それらの絵図に目を通してみると、いずれも日本刀様の「片刃」の刀剣を両手で操作する様子が表現されており、日本の剣術に類似しているのである。単なる外観上の類似にとどまらず、「倭」という日本を指し示す漢字を含む「倭劔譜」と称するものも存在している。このことは、朝鮮李朝社会へ日本剣術文化の一端が伝播していたことを示すのみならず、それが受容されていた具体的事例と捉えられる。

現代の韓国剣道と、朝鮮李朝期の「倭劔譜」に記載された刀剣技を直接結びつけて考えることはできないが、歴史のある時点において、近現代の韓国が剣道を受容したことに類似した事象があったことは注目に値する。このことから、「倭劔譜」の形成における日本剣術文化受容の経緯について明らかにしていくことは、現代韓国剣道のあり方への理解に、さらには、剣道の国際化、国際普及における課題解決に、なんらかの示唆を与えてくれるものと考えられる。

以上のようなことから、「倭劔譜」形成背景としての朝鮮李朝期武芸書における日本剣術文化受容系譜について明らかにすべく研究を進めている。この過程において、朝鮮李朝期武芸書以外の文献史料の中に散在する名辞「倭劔」を整理して捉えることの必要性を痛感した。

2. 研究の目的

朝鮮伝統武芸の基本的文献として『武藝圖

譜通志』(1790年刊)、『武藝諸譜翻譯續集』(1610年刊)、『武藝諸譜』(1598年刊)があるが、それらの中に刀剣に関する技法が掲載され、日本剣術との関連が確認されている。その中でも『武藝圖譜通志』や『武藝諸譜翻譯續集』に登場する「倭劔譜」という刀剣技法は、日本の剣術技法が伝播受容された具体的事例として注目に値する。特に用語としての「倭劔」は、最初の朝鮮武芸書と位置付けられる『武藝諸譜』の中には見られず、後に刊行された書籍に登場してくる。また、朝鮮武芸書以外の朝鮮文献中に「倭劔」の用語の散在が確認されている。

本研究においては、朝鮮李朝期文献に散在する用語「倭劔」とその周辺事項を解釈し、朝鮮社会における「倭劔」の意義を探求するとともに、伝播した日本剣術が異郷の地で何をもたらしたのかについて明らかにすることを最終的な目的としている。歴史のなかでの文化伝播事象を、現代のグローバル社会における文化流動とを完全に重ね合わせて捉えることはできないが、歴史的事象の解釈は、現状の理解の一助となる。この意味において、本研究は、単なる歴史学の研究にとどまらず、現代剣道の海外伝播状況の理解につながるものであり、身体教育・スポーツ科学分野における学術的な意味は少なくない。

3. 研究の方法

本研究は、朝鮮武芸書である『武藝諸譜』、『武藝諸譜翻譯續集』、『武藝圖譜通志』の刀剣に関する記述内容、中国武芸書である『紀效新書』、『武備志』の刀剣に関する記述内容、さらには、『朝鮮王朝実録』、『韓國文集叢刊』などの朝鮮文献の記述内容を解釈分析する、文献研究手法により進めた。

『武藝諸譜』、『武藝諸譜翻譯續集』、『武藝圖譜通志』の刀剣に関する記述内容、中国武芸書である『紀效新書』、『武備志』の刀剣に関する記述内容の解釈分析においては、文章ばかりでなく、技法説明のための絵図にも焦点を当て、従来看過されがちであったその変化変容について見過ごさず、考察を行った。

また、『朝鮮王朝実録』、『韓國文集叢刊』といった、韓国文化史における主要史料については、韓国古典総合データベース(<http://db.itkc.or.kr/>)なども援用した。

4. 研究成果

(1) 日本剣術の文化変容について

『武藝諸譜翻譯續集』にみられる「倭劔」記事の概要

『武藝諸譜翻譯續集』は、1610年、崔起南という人物により朝鮮半島において刊行された武芸書で、「拳」「青龍堰月刀」「夾刀棍」「鈎鎗」「倭劔」の5種類の武芸に関する武器や技法についての内容が掲載されている。本研究では、特に「倭劔」に着目したため、ここでは『武藝諸譜翻譯續集』所収の「倭劔」関連記事の全体像を示す。

「倭劔」に関する記述の全体の項目を列挙すると、「倭劔譜（漢文・絵図）」「倭劔総圖」「倭劔譜（ハングル文・漢字）」「新書倭劔圖（絵図・漢文）」となる。「倭劔譜」は、漢文と絵図で構成されたものと、漢文・諺文（ハングル文）で構成されたものの二つがあるが、漢文と諺文によって示されたものは、漢文のみで示されたものの翻訳に相当する。そこで、上記の4項目を、「倭劔譜」「倭劔総圖」「新書倭劔圖」の3項目に整理分類し、それぞれにおいて、その概要を述べる。

まず、「倭劔譜」についてである。『武藝諸譜翻譯續集』で取り上げられる武器を使用する「青龍堰月刀」「夾刀棍」「鉤鎗」の武芸では、その武器の絵図がおのおの「譜（物事を系統だててしるしたもの）」の最初に掲載されているが、「倭劔譜」については、使用される刀劔それ自体についての絵図は見られない。しかしながら日本刀様の刀劔を操作する技法について、漢文で詳細に解説がされており、その解説文の合間に、両手で刀劔を操作する人物の絵図が示されている。この「倭劔譜」は、『武藝諸譜翻譯續集』の「倭劔」関連記事の中核をなしている。

続いて掲載される「倭劔総圖」では、技法解説のなかに登場する「勢法」の具体的名称を特に取り上げて、それを順序立てて並べ、一連の技法展開がわかるように示されている。すなわち、「倭劔譜」と「倭劔総圖」を通してみることによって、「倭劔」の刀劔操作技法形式の全体像が把握できるようになっている。

一連の「倭劔」関連記事の最後に掲載されているのが、「新書倭劔圖」である。ここには、刀劔を保持した人物が5体、黒塗りの「人影図」によって示され、続いて、それに関する解説文が掲載されている。

『紀效新書』「影流之目録」から『武藝諸譜翻譯續集』「新書倭劔圖」への変容

『武藝諸譜翻譯續集』に以上にもみるような「倭劔」関連記事が掲載されている背景として、中国武芸書である『紀效新書』の存在は無視できない。

『紀效新書』は、明の武将・戚繼光（1528年～1587年）によって記されたものである。笠尾恭二氏や屈国鋒氏は、『紀效新書』がそれまでの中国兵法書と異なり、戦略・戦術よりも実践的な武術の具体的技法について詳述していることを強調している。実際にその内容を確認すると、絵図が多用され具体的な動作技法が示されており、兵士訓練に当たった実践的性格を有した武芸書であったことがわかる。そのようなわかりやすさと実践性のゆえに、後代に刊行された兵法武芸書において、頻繁に参照、引用されたのみならず、再刊行もなされている。松田隆智氏は、『紀效新書』に18巻構成のもの、14巻構成のものがあることを指摘している。18巻構成のものは戚繼光壮年期に刊行されたと

され、14巻構成のものは、晩年の1584年の成立とされる。刊行年の相違だけでなく、内容についても一定の共通性を含みながらも相違があることが把握されている。具体的には、刀劔に関する技法について、後に刊行された14巻構成の『紀效新書』において充実がみられるのである。我が国劔術流派の目録断片と考えられている「影流之目録」は、この14巻構成『紀效新書』に掲載されている。

「影流之目録」には、日本語の崩し文字や「猿飛」「猿廻」といった、日本の「陰流」系統の劔術流派における用語も見える。また、この目録上部の余白には、「此れ倭夷の原本なり。辛酉の年、陣上に之を得る」と明記されている。後に中国で茅元儀によって編纂された武芸書『武備志』においても、「長刀は、すなわち倭寇の習うところのものである。世宗の時代、進んで東南を犯すことがあり、戚少保（戚繼光）は、辛酉の陣上においてその習法を得た」という記述がみられる。「辛酉」という年、すなわち永禄4年（1561年）当時における我が国の劔術流派の展開と、目録巻頭に記載される「影流」という言葉との関連性から、「影流之目録」は、愛洲移香の「陰流」目録断片とする捉え方をしている。ほとんどの先行研究がこの立場をとっており、その見解が定説となっている。また、この目録断片が、当時活動が活発であった倭寇（「東アジアの沿海諸地域を舞台とした海民集団の一大運動」と田中氏は述べる）との戦闘陣上に伝わったこともほぼ通説となっている。そのようにして伝わった「影流之目録」は、『紀效新書』所収の刀劔操作技法に一定の影響を与えたのみならず、朝鮮半島で刊行された『武藝諸譜翻譯續集』にも取り込まれていく。

『武藝諸譜翻譯續集』「新書倭劔圖」が『紀效新書』「影流之目録」と関係するものであることは、その絵図の様相から直感されるところである。それだけでなく、『武藝諸譜翻譯續集』「倭劔譜」の中に、「倭劔の圖、本、戚將軍、之れを陣上において得るものなり」とある内容が、戚繼光『紀效新書』「影流之目録」の上部にある「習法、此れ倭夷の原本なり。辛酉の年、陣上に之を得る」という内容と重なること、「新書倭劔圖」の「新書」という言葉が、『紀效新書』を指し示しているであろうこと、「新書倭劔圖」の「第一」から「第五」の絵図の形態が『紀效新書』「影流之目録」に重なること、などの点が確認され、「新書倭劔圖」が『紀效新書』「影流之目録」からの抜粋で構成されているのは明らかである。

両者の体裁について比較してみると、『武藝諸譜翻譯續集』「新書倭劔圖」においては「人影図の一部が削除されている」「崩し文字による目録部分がない」「人影図の足元に『第一』～『第五』が加筆されている」といった相違点、すなわち変容を把握することができる。これら変容の背景には、『武藝諸譜

翻譯續集』「倭劍譜」成立の背景となっている、「降倭（豊臣秀吉による朝鮮出兵の折、投降した日本人武将の通称）」という敵対する国の武将や兵卒であった者から、「倭人剣術」という敵国の刀剣操作技法を受容したということがあった。そこには当然少なからざる感情的抵抗感が存在したと考えられるが、そのような抵抗感を緩和するための工夫により、前述の体裁の変容が引き起こされたようである。

(2) 用語「倭劍」の来歴について

これまでの研究過程を通して、用語「倭劍」が武芸書以外の朝鮮文献の中に散在していることを確認してきた。そこで、本研究では、朝鮮李朝期（1392年～1910年）の編年体記録である『朝鮮王朝實録』のなかに「倭劍」の用語を探っていった。ここでの目的は、『武藝諸譜翻譯續集』にみられる「倭劍」用語の背景を探ることにあつたので、凡そ500年間分ある『朝鮮王朝實録』の全てを網羅するのではなく、『武藝諸譜翻譯續集』成立年である1610年以前でその用例を取り上げ、解釈した。加えて、朝鮮李朝期以前の文献『高麗史』の中にみられる用語「倭劍」の用例も取り上げて考察した。これらを通して、用語「倭劍」をめぐる周辺事項について、その一端を明らかにすることができた。この研究成果については、近日中に論文投稿する予定である。

(3) 『古事記』にみられる用語分析を通して

ここにおいては、わが国最初の文学書であり歴史書である『古事記』に焦点を絞り、『古事記』内にみられる武道関係用語を細項目において分類整理して捉えるとともに、『古事記』における武道関係用語の分布について明らかにした。特に刀剣関係用語に着目し、用語の文脈上の利用傾向についても明らかにした。

本研究を通して、明らかになった内容は、我が国最古の書籍である『古事記』の中の武道関係用語を「武を行う者」、「武器（術）」、「武の総称」という項目に整理して捉えた。「武の総称」に相当する用語はなかったものの、「武器（術）」に関する用語は全体の約85%であった、ということである。

この結論は、日本剣術海外伝播を古代史から考える際の重要な示唆を与えるものである。

<引用参考文献等>

大石純子, 東アジアにおける日本剣術の受容と変容, 月刊武道 4月号, 査読無 Vol. 581, 2015, 136-143.

大石純子, 朝鮮文献にみられる「倭劍」に関する一考察, 日本武道学会第46回大会・第1回国際武道会議, 2013年9月12日, 筑波大学

大石純子・酒井利信・原口理恵子・軽米克尊・村上雷多, 『古事記』にみられる武道

関係用語に関する一考察, 身体運動文化研究, 20巻1号, 査読有, 2015. 45-64.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

大石純子, 国際開発における剣道の現状と可能性, 筑波大学体育系紀要, 39巻, 査読有, 2016. 1-12.

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=39245&item_no=1&page_id=13&block_id=83

大石純子, 東アジアにおける日本剣術の受容と変容, 月刊武道 4月号, 査読無 Vol. 581, 2015, 136-143.

大石純子・酒井利信・原口理恵子・軽米克尊・村上雷多, 『古事記』にみられる武道関係用語に関する一考察, 身体運動文化研究, 20巻1号, 査読有, 2015. 45-64.

〔学会発表〕(計 3 件)

大石純子, Japanese Swordsmanship in Korea: The process of Acceptance, Korean Alliance of Martial Arts (招待講演) 国際学会, 2015年11月21-22日, 韓国(茂朱)

大石純子, 朝鮮文献にみられる「倭劍」に関する一考察, 日本武道学会第46回大会・第1回国際武道会議, 2013年9月12日, 筑波大学(茨城県つくば市)

大石純子, 剣道の国際化-東アジアの事情, 第21回国際ハンガリー剣道杯セミナー(招待講演), 2013年7月25日, ハンガリー(ブダペスト)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大石 純子 (OHISHI, Junko)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号: 50410163